慈濟 ものがたり

コロナ禍の下での支え合い

生活支援・学習伴走・第一線への防疫物資の提供

●扉の言葉　文・證厳法師　訳・済運　撮影・蕭耀華

三善を行えば、世は安らぐ

欲望は谷のように深く、山林は伐採され、
大地の母は、傷だらけになっています。
人災が禍を引き起こし、災難となって降りかかります。
多くの人が心を合わせ、皆で三善を行うことです。
できる限り善人を迎え入れ、善法を広め、
善い言葉を口にして、善でもって世を安泰にするのです。

慈済日本サイト

目次

【編集者の言葉】
共に築こう！柔軟且つ強靭な防疫網　善耕／訳　4

【主題報道】
コロナ禍の下での支え合い　有田夏子／訳　8
電話口のヒーローが家庭の危機を救う　有田夏子／訳　18
住民が安心できる場所　葉美娥／訳　26
台湾には愛がある・心を一つに防疫しよう　明陛／訳　35
キャリアウーマンのテレワーク　心婺／訳　40

【證厳法師のお諭し】
心が清らかになる起点　慈願／訳　48

【人物誌・厦門】
喜んで手を繋ぐ　あなたがしっかり歩けるように　明湉／訳　53

【コロナ特別報道】
インド（上）
ひと呼吸の間にある命を救う　惟明／訳　66
ベトナム
防疫模範生が焦眉の急を告げる　荳荳／訳　79
シンガポール
異国の地で頑張る人々がパッチワークで故郷への思いを紡ぐ　御山凛／訳　90

【行脚の軌跡】
愛は一切を成就する　済運／訳　100
九月の出来事　済運／訳　106

表紙

慈済は静思堂を新型コロナウイルスのワクチン接種会場として提供した。台南善化連絡処は、全台湾で最初に慈済が提供した接種会場である。ボランティアが心を込めて整えた環境の中で、医療スタッフと住民は安心して接種作業を終えた。（撮影・黄筱哲）

編集者の言葉

共に築こう！柔軟且つ強靭な防疫網

◎訳・善耕

台湾で実施されたステイホーム感染防止策から一カ月半が経ち、コロナ禍は次第に落ち着いてきたため、政府は「警戒体制の小規模解除」を発表した。しかし、ウイルスの変異株が後を絶たず、慎重に防疫を続ける必要がある。

コロナ禍は鏡のようなもので、非常時には人々が互いに一層ケアし合う必要があることを映し出している。脆弱な部分が修復されれば、社会は強靭性を回復することができるのだ。

中央研究院の社会学者である林宗弘（リン・ソンホン）氏の研究によると、相対的に社会福祉システムが整った北欧諸国は脆弱性が比較的低いため、コロナ禍においても相対的によく制御されている。社会階層が比較的平等で、人同士の間や政府との協力度合いが高い国ほど、災害下でのインパクトは小さく、災害後に残る心的外傷も少ない。

感染拡大に覆われる中、慈済ボランティアは慈善訪問ケアを電話に切り替えて続けている。ケア世帯が生活に困っていないかを気にかけ、補助の申請を手伝うだけでなく、より多くの時間を使って相手の話に耳を傾け、張り詰めた情緒のはけ口になるよう努めている。直接訪問することができず、体の状態や顔の表情を見ることができないため、相手に詐欺電話かと疑われることがよくある。それゆえ一層、ボランティアは話す時の語気に気をつけて相手に温かい印象を与えるように注意を払っている。

あるボランティアは、毎日ニュースを見て不安に感じていたケア世帯に何度も電話をかけ、「私たちが寄り添っていますよ」と慰め、やっと相手を落

ち着かせたことがある、と言った。また、緊急支援を受け取っていなかったら、行き場を失って子供と一緒に無理心中することも考えたというケースもあり、後になってそれを知った。これらの経験から、ボランティアはケアの緊急性を心から感じた。

今月号の主題報道に掲載しているが、昨年のコロナ禍の発生当初、慈済基金会は直ちに県や市政府と「慈善協力に関する覚書」を交わした。今もコロナ禍が深刻化する中、県や市政府と協力して、「自宅待機」している人々や支援を必要としている社会的弱者のために、米や麺など日常的な食糧を中心とした「安心生活ボックス」を提供している。多くの恵まれない生徒にとって、学校の給食は重要な栄養源である。学校が休校になっていることを考慮して、慈済は世帯単位で「健康野菜果物ボックス」を提供している。

慈済ボランティアによる電話での訪問ケアは増え続けており、公的機関を介して関連業者への雇用機会も生み出している。基隆では、「健康野菜果物ボックス」の梱包・配送当日に青果市場が休みだったため、明け方に小売業者が集まって良質の新鮮な果物や野菜を選び、箱詰めした後、タクシー業者によって必要としていた世帯に配送された。

「安心生活ボックス」も台湾にいる東南アジアの留学生や外国人労働者をケア対象として聖クリストファー教会に届けられた。シスター・阮艷紅（ルアン・イエンホン）は、コロナ禍で人々は隔離を余儀なくされているが、心は隔離を乗り越えることができると述べた。宗教に関係なく、思いやりのある心を通して、人はどうしてほしいかを見て取ることができる。

證厳法師もこう指摘した。人々がお互いの身の上を思いやる限り、愛のエネルギーは最終的にコロナ禍による不安や恐怖を一掃してくれるので、希望がどこにあるかを見出だすことができる、と。（慈済月刊六五七期より）

主題報道

コロナ禍の下での支え合い

新型コロナウイルスの感染警戒レベル3が四度延長された。
感染予防は日常生活に浸透したが、
経済活動が制限されたため、多くの家庭が苦境に陥っている。
一本の電話が、家庭の危機を救う。
一本のワクチンのため、医療スタッフは仕事を続ける。
一人一人が自分を律し、互いに支え合いながら、コロナ禍を乗り切る。

（慈済台南善化連絡処ワクチン接種会場）

撮影・黄筱哲　訳・有田夏子

ワクチン接種・地域ボランティア動員

政府は六月中旬より全国民への新型コロナウイルスワクチン接種を急いだ。慈済は、大規模や中規模ワクチン接種会場に、十いくつもの集会所と台南慈済中学校内の場所を提供した。防護服を着たボランティアたちは、民衆を移動経路に沿って誘導し、医師の問診後にワクチン接種を行うことで、スピーディで最も親切なサービスを提供した。

（写真　一番右・新北市三重静思堂　写真提供・羅美珠。
右＆下・台南慈済中学校　撮影・黄筱哲）

スクリーニング検査
お互いを守るため

七月十日の統計によれば、台湾全土で新型コロナウイルスの検査を受けた延べ人数は累計二百万人を超えた。台南市松柏育楽センターのスクリーニング検査会場では、医師が加圧室内で検査を行っていた。この方法だと防護服を着て汗だくになる必要がなく、また接触も避けられるので、お互いの安全を確保することができる。検査量の増加に伴い、慈済は十一の県と市の二十五の会場に仮設スクリーニング検査会場を設けた。

規則を守り
自粛生活 街角の日常風景

列に並び、体温を測り、入場するたびにＱＲコードを読み取る。身分証番号の奇数と偶数で、入場可能日を分けている県や市もある。市場では、かつての互いの肩が触れ合うような人混みは姿を消し、代わりに実名登録制、出入口と入場制限を行い、買い物を終えるとすぐにその場を離れるよう呼びかけた。

（右・台南市東区　上・台北市木柵）

栄養ある食品を自宅に配送

山間部にある台南南化中学校では、教師と慈済ボランティアが「安心生活ボックス」と「健康野菜果物ボックス」、そして白米を学生たちの自宅に届けた。六月末、慈済は各業界と協力して栄養救済計画を開始した。七月から八月にわたる夏休み期間、十四の県と市に住む児童を抱える四万世帯以上の生活困窮家庭が、主食となる食材や新鮮な野菜と果物を受け取った。

電話口のヒーローが家庭の危機を救う

文・梁嫣親（慈済基金会慈善志業発展処スタッフ）　訳・有田夏子

新型コロナウイルスの警戒期間中、外出して訪問ケアをすることができなくなると、私たちはすぐに電話による訪問を開始した。電話口から聞こえてくるのは、出勤出席停止後の苦境である。家族と一日中一緒に過ごすことで生じる摩擦から起きる感情のはけ口を求める声や互いを思いやる温かい祝福……。ソーシャルワーカーとボランティアたちは、まるで電話口のヒーローのように、彼らを守る網を張り、コロナ禍で苦境に陥った家庭を受け止めている。

「こんにちは、慈済のボランティアです。最近の生活はいかがですか？私たちに何かすることはありませんか？」

「こんにちは、慈済基金会のソーシャルワーカーです。コロナ禍の期間中、生活に影響はありませんか？」

五月に新型コロナウイルスの感染が拡大してから、台湾全土で警戒レベルが３に引き上げられ、慈済のソーシャルワーカーとボランティアは、外出を伴う訪問ケアができなくなると、方法を変えて、すぐに電話による訪問ケアを開始し、いつもと変わらぬ思いやりを届け続けた。彼らは花蓮、台東、宜蘭地区だけで毎週平均して千本の電話をケア世帯にかけ続けている。電話をするたびに、コロナ禍で苦境に陥り、助けを求める無数の人々の声が聞こえてくる。一回の電話には約三十分を要するが、時には二時間に及ぶことさえある。ソーシャルワーカーとボランティアには、相手の顔が見えない電話訪問で誠実さと真心を届ける術を学ぶ忍耐強さが必要だ。

ある日、電話を終えたソーシャルワーカーの徐さんの目には涙が浮かんでいた。二時間に及ぶ電話の後で喉が渇いているはずだと思い、私は水を手渡した。彼女はそれをごくごくと飲み干してから、こう言った。「この電話をかけて、本当に良かった。この母親はぎりぎりまで追い詰められていたのです。まるで、この電話が命綱のようでした！」。

電話相手の林（リン）さんという女性は幼稚園の先生で、母親と同居しなが

ら、十五歳の息子、阿杰（アジエ）君を育てていた。阿杰君は暴力傾向のある注意欠陥・多動性障害児だ。体格の良い彼は、しばしば感情を制御できなくなって、彼を世話している祖母を殴打していた。ソーシャルワーカーが訪問した際、阿杰君につねられ、青あざができたこともある。コロナ禍で学校が休校になると、阿杰君は一日中家で過ごすことになった。家族三人が自宅にこもりきりになり、林さんは初めて二十四時間、阿杰君と一つの空間で生活することになった。

学校へ行けなくなった阿杰君はさらに暴力的になった。学校や介護のデイサービスも受けられない。阿杰君はまるで、いつなんどき爆発し、林さんたちを粉々に砕いてしまうかわからない時限爆弾のようだと林さんは言った。林さんと六十歳過ぎの母親は、日々何度も阿杰君から暴力を受けていた。林さんは自分が孤立無援であると感じ、全ての希望を失ってヒステリー状態にあった時、ソーシャルワーカーからの電話を受けた。溺れる人の前に現れた流木のように、一筋の希望を与えたのだ。

二時間近い電話は、会話をするというよりは、林さんの話を一方的に聞き続けるものだった。ソーシャルワーカーは電話口で辛抱強く耳を傾け、タイミングよく慰めの言葉をかけた。最後に「ほかに何か助けが必要ですか？」と尋ねると、林さんは「経済的にはなんとかなっています。ただ、毎週、何度か私に電話をいただけませんか？この電話が私を救ってくれたのです」と答えた。ソーシャルワーカーは電話を終えてしばらく、感動で胸がいっぱいになった。たった二時間話に耳を傾けたことで、一人の母親を、そして家庭を救ったのだ。

小さな私たちの大きな志

私はあの日、花蓮県瑞穂郷の視覚障害者、阿勇（アヨン）さんに電話をかけ、コロナ禍で外出できない彼がどのように生活しているのかを尋ねた。電話口の向こうの彼は、教会に行けず、介護スタッフも食事を家まで届けるだけで、家に入って掃除することができないと言った。彼はまた、幸運にも私たちが贈った「福富足小妙音」スピーカー内蔵ＭＰ３プレーヤーがあるので、毎日證厳法師の開示を聞いていると言った。

私が「では、どのお話が心に残りましたか？」と尋ねると、彼は「證厳法師は、良いことをしなさいとおっしゃいました。だから、私は毎日竹筒に小銭を入れています。竹筒はもう満杯になりそうなのに、あなたたちは取りに来ませんね」と言った。

私は彼に、コロナ禍の関係でしばらくは訪問できないことを伝え、また空き瓶を利用してその善行を続けるよう励ました。最後に「他に私たちにできることはありますか？」と尋ねると、彼は「ありません。ただ、毎日私に電話をかけて、話に付き合ってもらいたいだけです」と答えた。

電話を置いた私は、胸がいっぱいになった。彼らが求めているのは、一本の電話。こんなにも簡単なことだったのだ。

窓の外の青い空を眺めながら考えた。いつになれば、マスクをはずし、以前と同じ生活に戻り、家庭訪問を再開できるのだろう？当たり前に思えた生活が、これほど貴重なものだったとは。

そばにいる仲間たちは、毎日自主的に長期ケア対象の家庭に電話をかけ、或いは助けを求めてホットラインに掛けてくる電話に応対している。時には水を飲むこともトイレに行くことも忘れるほど忙しい。人々の負の感情を受け止め、頭を冷静に保ちながら相手の状況を確認する。彼らの困難をよく理解し、適切な支援を提供する。それを一日中続けるのだから、疲れないわけがない。

これが私たち支援スタッフの日常風景だ。このような些細な事を毎日続け、パソコンの前に座って話し続ける。事情を知らない人が見れば、おしゃべりにふけっているようにしか見えないだろう。だが毎

●電話訪問によってコロナ禍で苦境に陥った家庭に感情のはけ口や必要なサポートを提供するためには、豊富な訪問ケアの経験と共感する心が必要だ。（撮影・蕭耀華）

回の電話には、真心と忍耐と時間が必要だ。忍耐強く、心を強く保ち、人助けを志した初心を常に堅持していなければ、これほど多くの電話をかけ続けて一つ一つ対応することなどできはしない。

「ソーシャルワーカーと師姑の皆さんも，お身体に気を付けて！」電話を切る前に、このような祝福の言葉をかけてくれることが多いのだと、あるソーシャルワーカーが言った。このような祝福が、終わりのない電話を一本、また一本とかけつづける力を与えてくれる。他人のために灯した光は、自分の周りをも照らしてくれる。他人を一心に思いやれば、人と人のかかわりの中で温かさを感じることができる。そして、その温かさが希望をくれるのだ。

コロナ禍の今、私たちはケア対象の家庭に比べて恵まれている。私たちは人助けの仕事ができるし、衣食の心配もない。コロナ禍による営業停止により、多くの家庭が経済的に苦しくなり、学校が自宅でのオンライン授業に切り替えても、授業を受ける設備もないのだ……。生活のリズムが失われ、次々と襲い来る問題の数々が家庭を圧迫している。

中部地区の慈誠（授証を受けた男性のボランティア）隊の「回眸慈善來時路（来た慈善の道をふりかえる）」活動で、證厳法師がおっしゃった言葉を思い出した。「一九九九年台湾中部大地震や一九九六年の台風九号では、まさに自然災害の威力を思い知りました。その威力を前にすれば、人間は本当に小さく感じられますが、しかし大事を成すこともできるのです」。

コロナ禍での非情な威力の前に、私たち人間はなんと小さいことかと思い知る。だが小さな私たちも、毎日人助けのエネルギーを積み上げることができる。電話訪問でケア対象の家庭の状況や安否を確認し、必要な時にはいつでも慈済を頼っていいこと、そして慈済は助けを必要とする家庭の後ろ盾であることを伝えている。小さな私たちが、電話口のヒーローになって「愛」の保護網を作りだし、コロナ禍で墜落していく家庭を受け止める。そして彼らに寄り添いながら、この困難な時期をともに乗り越えていくのだ。

コロナ禍が厳しさを増す中、私たちに必要なのは特殊な能力を持ったヒーローではない。私たちの一人一人の心の中にも無敵のヒーローが住んでいて、誰かが助けを求めている時に、手を差し伸べて引っ張ればよいのだ。

（慈済月刊六五七期より）

住民が安心できる場所

文・高玉美（新北市板橋区ボランティア）撮影・蕭耀華　訳・葉美娥

ワクチン接種会場をすぐ近くに設けることで、人々はバスを乗り継ぐ手間もなく、密集した病院での感染リスクも避けることができる。慈済ボランティアは良質な環境を作って、近所の住民が安心してワクチン接種を受け、皆でウィルスの感染拡大を防ぐことができるようにしている。

六月末は、頭がくらくらするほど真夏の太陽が照りつける。慈済板橋志業パークは、新北市政府を支援して新型コロナウイルスのワクチン接種会場を設置した。曹聰賢（ゾン・ツォンシエン）さんと詹龍禎（ジャン・ロンジェン）さんたち約二十人のボランティアは、静思堂前の歩道に三つの大型テントを増設するのに忙しかった。

「私たちは六月十五日の第一回ワクチン接種から今日まで、異なる接種対象や人数に合わせて、何度も移動経路を調整しました。接種に訪れた人たちがここに来て安心できるようにと考えたのです」。接種開始の通達を受けてから曹さんは、昼間は板橋静思堂を家とし、屋内の床にベニヤ板を敷く作業、会場の整理、テーブルや椅子の配置などの準備作業から、ワクチン接種の実施まで、ほとんど全過程に参与してきた。また、他のボランティアたちと一緒に、台北慈済病院看護部主任から、正確な感染防護装備の着脱方法を学んだ。

ワクチン接種の初日、曹さんはマスク、フェースシールド、隔離ガウン、手袋、キャップなどの全身防護装備を着用し、第一線に立って来場者に奉仕した。慈済板橋志業パークに来たのは初めてという年配者が多かったので、ボランティアは親切に誘導して福慧ホールの席に案内した。医師の問診を受けてから、看護師によってワクチン接種を受け、その後、薬剤師から解熱鎮痛剤をもらい、接種後の経過観察をして異常がない人は、家族に付き添われて帰って行った。

福慧ホールの左側出口に立っていた曹さんは、消毒用アルコールスプレーを手にして、「手を広げてください。アルコールで消毒して、皆さんの健康を守りますから」と声を掛けていた。車椅子を押し

ていた介護者には、「斜面に注意してくださいね」と注意を促し、自然と車椅子に手を伸ばして年配者の移動を手伝った。

側にいた陳明月（チェン・ミンユエ）さんは、静思精舎の尼僧から頂いた縁結びの香ばしい豆乳パウダーを人々に配った。あるおばあちゃんが「これは何ですか？」と聞いたので、曹さんは、「これは、精舎の師父たちが皆さんの健康を祈る豆乳パウダーですよ。お湯を注げば、すぐに飲めます。栄養満点の食品ですよ」と答えた。「なんて思いやりがあるのでしょう。ワクチンを接種した上に、師父たちの祝福まで頂くなんて、本当に良かった！」とおばあちゃんは喜んだ。

百年に一度の挑戦

忙しかった午前中にやっと初日のワクチン接種が終った。昼食後、曹さんは来場者が使ったクリップボードとボールペンをアルコールで消毒するのに忙しかった。その時、スマホが鳴り、話を聞き終わると直ぐに屋外に向かった。「瑞発（ルイファー）さん、來成（ライチェン）さん、終わった後も残ってくれませんか。お昼に台北慈済病院の趙院長が板橋の接種状況を視察に来られた時、移動経路を調整した方がいいという提案があったのです……」。

あの日、会場のボランティアは全員残って、八人が一組となって歩道に立ててあったテントをアーチ橋の上に移し、年配者が日差しに晒されないようにした。もう一組は接種会場の椅子の配置を調整した。「私たちは年配者が椅子に座って問診と接種、接種後の経過観察をする間、付き添い

静思堂でワクチン接種を受ける人たちが強い日差しや雨に濡れるのを避けられるよう、板橋区のボランティアが、入念に配置と移動経路を調整していた。

曹聰賢さん（左1人目）はボランティアたちと日々の異なる状況の下に、弾力的に現場の配置を調整していた。その作業が終わると、接種会場へ戻って訪れた人々を誘導した。

の家族が側で立ったままなのに気付きました。そこで、待機エリアに家族の椅子も置くことにしました」と丁度椅子を運んでいた曹さんが言った。

六月半ばのAZワクチン接種が円満に終ったのに続いて、七月初めからモデルナワクチンの接種が始まり、接種年齢層も七十五歳に引き下げられ、前もってネットで予約してから地域の接種会場に行くようになった。六月末、家で休んでいた曹さんはメッセージを受け取った。

「七月二日から四日に板橋志業パークのワクチン接種は、毎日千五百人以上の予約が入り、…」。彼はすぐに陳火全（チェン・フオチュエン）さんに電話し、改めて移動経路をアレンジした。

三倍近い接種人数に対応するため、趙院長は医療チームを率いて、再度板橋志業パークを訪れ、新しい配置をボランティアと相談した。翌日、サポートチームは歩道脇に集合し、一時間も立たないうちに、三つの大型テントが南大門脇に出現した。予約者らが到着した時、先ずテントの下で待ってもらうが、大型扇風機を使うので、多少は暑さを和らげることができる。

三日間で三千人余りの接種を終え、スムーズな移動経路と満足そうな人々を見て、「何度も意見を交わして指導してくれた台北慈済病院の医療チームに感謝します。それに板橋チームが直ちに必要な場所を補填し、一部の人が午前中に医療ボランティアをしたあと、午後は防護服を脱いでサポートチームに変身し、いつでも状況の変化球を受け止めていました。多くの人がワクチンに守られるのを見れば、どんな挑戦でも喜んで受けたいと思っています」と曹さんが言った。

話し終わった途端、曹さんのスマホにワクチンチームからメッセージが入った。「生鮮野菜市場でクラスターが発生しそうな状況なのです。新北市政府はコ

慈済人として、第一線に立たなければ気がすまないのだ。匹夫の勇をひけらかすのではない。自分の身を護ることは他人を護ることにもなるのである。丁度ワクチン接種会場でボランティアを募集していたので、私は年配者への奉仕というこのチャンスを逃さず、温かく接して喜んでもらいたいのだ。それで自分にも達成感が得られ、また慈済人としての責任も果たすことができるのだ。

――慈済ボランティア　謝秀華さん

私は看護スタッフではないので、最前線で患者の面倒を見ることはできないが、遠くからでも医療スタッフの世話をして、彼らの休息時に飲み物等を出す手伝いぐらいはできる。コロナ禍の非常事態になった時、慈済は私たちを守ってくれるが、慈済人、それも委員として慈済を守れるのかと私はいつも思う。だから生活チームの一員として静思堂の環境の防疫やトイレの消毒などの仕事は、ワクチン接種が終わるまで頑張って続けるつもりだ。

――慈済ボランティア　葉水盆さん

ロナ対策に対応して、慈済板橋志業パークに支援を要請してきました。明日、板橋・樹林・新莊の市場出店者と行政人員のワクチン接種を行います」。ワクチン接種が追加されると聞いて、陳さんは「大した問題ではありません。皆でこの三日間の努めを完成させたではないですか。このような百年に一度の災難に遭遇したのですから、政府に協力して、全力を尽くせばいいのです」と豪快に笑いながら言った。

7月2日から4日までに、板橋静思堂で3千人余りが接種を完了した。来場者はホールに入って座れば移動する必要はなく、医師と看護師が3人1組で問診とワクチン接種を完了してくれる。

太った体つきをした李瑞発（リー・ルイファー）さんは、接種会場の配置を手伝い、接種が始まると外で来場者を誘導した。一日中防護装備に身を固めていると汗だくになり、その辛さは言葉では言えないほどだが、その中にも喜びを感じている。「コロナ禍で大勢の人が不幸にして亡くなっているのを目の当たりにして、もっと多くの人が早くワクチン接種を受けることで、感染拡大を抑えることができれば、私たちが流す汗には価値があるのです」と彼が言った。

一日も欠席していない曹さんの体力と気力に周りの人は感服している。防護装備で固めた痩せ型の体に雨のように大量の汗をかきながらも、会場の至る所で人々に奉仕していた。「防護装備を着用すると、隔離病室にいる医療スタッフの大変さが一層理解できるのです。皆さんも積極的にワクチン接種を受けてください。防疫力を向上させ、コロナ禍が弱まるように期待しています」。

夕方、太陽の光が板橋静思堂の後方から射しこみ、和やかで温かい感じがした。ボランティアは三つの大型扇風機と木陰の下にあった椅子をテントの下に収納した。曹さんと呂秋霞さん夫婦も、汗を拭いて乾いた服に着替えてから家に帰った。明日の任務が待っている。

（慈済月刊六五七期より）

台湾には愛がある 心を一つに防疫しよう

（7月18日までの統計）

訳・明陛

医療防疫物資の寄贈

- 基本的な個人用防護装備
- スクリーニング検査試薬
- 人工呼吸器、酸素濃縮機

合計2,524,214件

コロナ禍の影響による生活支援

● ７月中旬までに、25,500世帯に電話訪問。２割以上がコロナ禍で生計に影響を受ける。

● コロナ禍による生活困窮への経済支援として、救済金、チェーンストアと連携した「生活物資カード」を配付。

● 安心生活ボックス、安心祝福セット、感染予防セット、白米などの寄贈。

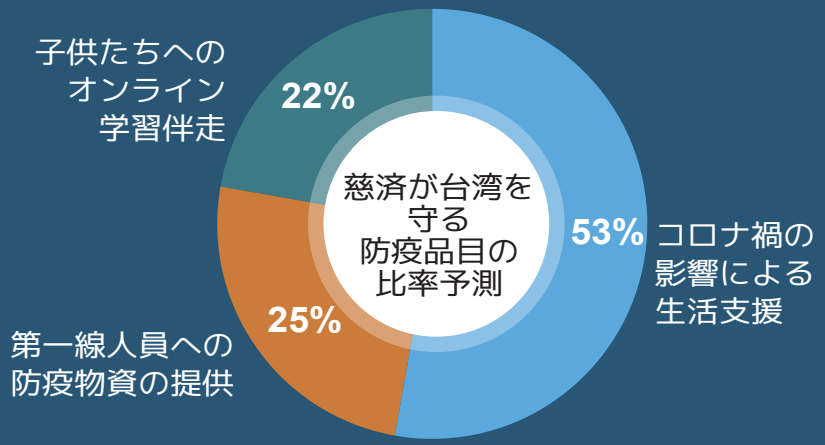
● 貧困家庭の児童に夏休み期間の栄養補給：14の県と市の45,339世帯に安心生活ボックスと健康野菜果物ボックスをそれぞれ２カ月間提供。

合計993,455件

安心就学プロジェクト

● 貧困家庭の児童が在宅オンライン授業を受けるためのノート型パソコン425台、インターネットルーター15,030台を提供。

● 学生サポーターのオンライン学習伴走：勉強サポートしたアルバイト大学生809人、サポートを受けた学生2,241人。



ワクチン接種会場の提供と人的支援

● 合計11の県と市に20カ所

スクリーニング検査用
仮設建築物の建設

● 11の県と市に25カ所
● 移動式コンテナハウスを含む、異なる大きさの仮設建築物

●慈済によるその他の支援活動と物資の寄贈に関する項目は、「台湾には愛がある・心を一つに防疫しよう」をご覧ください。

●慈善案件通報専用ダイヤル：0800−787−080

●台湾と全世界の防疫を一緒に頑張ろう。

キャリアウーマンのテレワーク

口述・林曉瑩（台南慈済高校人文室スタッフ）取材&編集・葉子豪 撮影・黄筱哲 訳・心瑩

生活様式を切り替える秘訣

・自宅で子育てと仕事を両立しているので、作業場を設けて精神上の境界線を引く。
・子どもたちに家事を手伝わせて、自分たちで手を動かすように促す。
何でも親に頼るのではないことを学ぶと、生活における経験と自立能力が向上する。
・自分をスーパーマンだと思うのではなく、心の安定度を高めて、
口うるさい配偶者を善に解釈し、良好な夫婦関係を維持すべきである。

私は台南慈済中学校の人文室に勤めている。主な仕事は慈済の各志業体間の調整で、学校や慈済基金会及びその他の志業体の資源を共有できるようにすることである。警戒レベル3がまだ発令される前、校長先生よりオンライン学習の運用に慣れるように言われていたので、教師たちは直ぐ関連設備やソフトウエアを使って練習した。電子機器に慣れている高校生たちも手伝いに来てくれた。

警戒レベルが3に引き上げられた後、校長先生は教師や職員の安全を考慮して在宅勤務を通達し、大部分の教師はリモート授業を始めた。しかし、自宅でリモート授業に参加できない生徒たちのために、学校は登校してくる生徒たちに教師が交代で付き添うよう手配した。

登校の当番のない日は自宅で仕事をすることになり、毎日オンラインで出退勤の届けを出し、仕事を日誌に書いて報告している。一時外出の際にも休暇届に記入している。私のケータイが故障した日があったのだが、オンラインで一時間の休みをもらってから出かけた。在宅勤務でもルールを守るようにしている。

在宅勤務は、女性にとっては少しばかり難儀だ。今まで職場には働くための完全な時間と環境があったが、在宅勤務で仕事と家庭が一緒になってしまうと、一息つく空間がなくなってしまった。部屋に入れば仕事モード、部屋から出れば母親なのである。例えば、たまに人文教科

の計画を練りながら、ちょっと子どもの様子を覗いてオンライン授業の画面の調整をしてやることもあり、職員室のように集中して仕事をすることはできない。それでも、限りある家庭環境の中で仕事場を設け、自分の気持ちを切り替えるための境界線を引いている。

我が家には小学三年生の娘と二年生の息子がいる。二人は、起床して歯を磨いて顔を洗い、朝食を終えると、ノートパソコンとタブレットに電源を入れてオンライン授業を受ける。先ず、先生からのお知らせを見て自分の連絡帳に書き写す。私は子どもたちに、一週間のオンライン学習の時間割を家の連絡ボードに書いてもらい、規律正しい生活スケジュールが一目でわかるようにした。

いつ何をするのかは学校と同じで、それがデジタル化されただけである。しかし、やはり小さな違反は起こるものだ。例えば、しばらく顔を合わせていないクラスメートを見つけてはメッセージで短い会話をすることがある。すると先生は、「今コメントやメッセージを送ってはいけませんよ！」、と制止する。私は、こういう状況は子どもたちが情報をやり取りする能力とマナーを学ぶ良いチャンスだと思っている。

子どもたちはそれぞれのスペースでオンライン授業を受けていた。林曉瑩さんは在宅勤務の合間にお茶を淹れると、ついでに子どもたちの学習の状況やオンライン接続の問題を解決した。

先生が感染予防について、あちこち出歩くことはせず、マスクを着用するようにと注意してくれるので、子供たちは必要以外の外出をしないこと、ソーシャルディスタンスを保つことの意味を知っている。でも私たちは、毎日彼らに運動の時間をとっている。例えば、マンションビルの中庭で縄跳びやサッカーをしたり、近所の公園を散歩したりする。何かさせてみれば、元気が出てくるものだ。そこで家事を手伝ってもらうようにした。例えば、今日はカレーライスを作るので、彼らに野菜の洗い方や切り方を教える。おやつが欲しい時は、私の同意を得て冷蔵庫からキウイフルーツを取り出してフルーツヨーグルトを作る。自分たちで手を動かせば、何でも親に頼らなければできないわけではないことを知り、日常生活の経験が増え、自立能力が向上するのである。

三月から五月にかけての毎週末はイベントが多く、ほとんど外出していた。あのような全力疾走の状態では、心を落ち着かせることなどできるわけがない。逆に、在宅勤務の間は本を読み返し、仕事に関連するビデオの資料を収集して、次の学期の教師研修コースの計画を立てることができた。

夫はテクノロジー産業の会社で働いており、警戒レベル3が発令されると、在宅勤務をしていた時期もあった。共働きして子供たちを育ててきた夫婦には、家事や育児を分担することで、良きパートナーだという感覚があった。ところが、妻が在宅勤務するようになると、夫はあたかも私が「育児休業を取った」と錯覚

子どもたちは台所に立って簡単な料理を作っていた。気分転換にもなり、このステイホームの期間中に、家での日常生活の自立を訓練することができる。

したのか、「今日はゴミを出してなかったぞ！洗濯物が溜まっているし……」と口うるさく言うようになった。私が勤務時間の合間を縫ってできるかぎり家事をしてきたのに、気づいていない。食事の支度や掃除にかかる時間が倍増し、その上、子供たちがリモート授業で直面する問題を解決しなければならないというのに。

自分の家だから誰が家事をどれだけするかは構わない。だが、新世代の女性が心身の健康を維持するためには、夫が本来担うべき家事を自分ができていなくても、それを罪悪感に感じないようにすることが大切だ。在宅勤務している全てのお母さんは自分をスーパーマンだと思ってはいけない。大切なことは心の安定度を高め、配偶者が勘違いして口うるさく言っても、寛大な心で理解することである。そうすれば、家事と育児が均衡に分担できると同時に、良好な夫婦関係を保つことができるのである。

（慈済月刊六五七期より）

林曉瑩さんは自宅に仕事場を設け、自分の気持ちを切り替えるための境界線を引いている。子どもが勉強の問題に直面した時は、根気よく応じている。

【證厳法師のお諭し】

心が清らかになる起点

菜食で衆生を護ることが心が清らかになる起点です。
清らかな心を培うには、生命を傷つけないことから始めるのです。

◎訳・慈願
絵・林順雄

ハイチで八月十四日の午前中、マグニチュード七・二の強烈な地震が発生し、死者千人余り、負傷者五千人余りの被害が出たところへ、ハリケーンが接近しました。風雨の中にいる苦難の人たちを思うと気が気でないのです。ハイチは普遍的に貧苦な状態にありますが、数人の慈済人が志業精神を以て長期に亘って現地を護り、アメリカのチームも関心を寄せています。しかし治安が悪く、毎回の支援は容易ではありません。

科学技術が発達したと言っても、地震が発生すると、数秒前に警報を出すことぐらいしかできず、人々は避難するのに充分な時間はありません。気がつく前に大地は激しく揺れ動きます。災難の多い世の中では人生は無常であり、瞬時に発生する事は知るよしもありません。平穏な日々の一分一秒にも感謝しなければなりません。私たちは事、人、時の全てで恩恵を受けています。感謝の気持ちがあれば、煩悩は自然と軽くなります。常に感謝の念を持てば、心が安らぎ、幸福や平穏、自在を感じることができるのです。

世界中に新型コロナウイルスの感染が広まっている中、とりわけ海外の状況は厳しく、人々は恐怖で神経が張り詰めています。今、人々はこの危機意識の中で、目覚めているでしょうか。警戒を高めなければなりません。コロ

ナ禍はどうやって出現したのでしょう。この状況は人の欲念から来ており、ぼんやりして道理を理解せず、口の欲を貪るがために、無数の生き物の命をその口に呑み込んでいるのです。統計によると、五百個の肉食の弁当を作ろうとすれば、三十八羽の鶏、或いは一頭の豚が殺されるそうです。世界八十億の人口で計算し、もし誰もが肉食ならば、五百人の一食でこれだけですから、どれほどの生き物を殺すことになるでしょう？殺生の業は非常に重いものです。世の中の災難が無くなるわけがありません。

無量無数の生きものの総称が「衆生」です。空を飛び、海を泳ぎ、陸地を走り回る、活き活きしたあらゆる生命が衆生であり、捉えられた時に網の中でもがき、殺された時に鮮血が地面を赤く染めます。人として生を授かっても、必ずしも一つ一つの生命を絶たなければ、生活を維持できないとは限らないのです。

私たちは人、事、物の全てに感謝し、生命の滋養になっている「五穀雑糧」に対しても感謝しなければなりません。天と地の間で、野菜や根菜、果物で人のお腹は満たされます。何も残酷な心を起こして動物を死に追いやることはありません。

肉食は健康的な食べ物ではなく、動物の体には細菌やウイルスが存在しているため、食べなければ、病が口から入ることを避けることができます。今回、コロナ禍の下で、少なからぬ医学専門の人たちが菜食を研究し始め、栄養バランスのよい菜食は健康を促進し、体質を改善するため、有益無害であることを証明しています。ですから、私たちはこの縁を把握して、菜食するという教育を推し進めるべきです。

五十年ほど前に出た、慈済創設の一念は衆生を救うことであり、それは「人間」に対してだけではありません。人と人の間で互いに励まし合い、共に力を合わせて「人」を苦難から救い出し、またその「人」を感化してあらゆる衆生を愛護することです。

菜食は自分の中に欠点のない愛を護ることができます。殺生せず、肉を食べないことは即ち、生き物を救い、放生と護生をすることです。それは清らかな心になる起点であり、一切の善の源なのです。善良な心を培うには、人、動物、天地など、あらゆるものを傷つけないことから始めなければなりません。

仏陀の教育でも科学の実証でも、全てが慈悲心をもって殺生しないこと、生きとし生けるものを愛護することを教えています。世間の道理はこのように明らかなのに、人は口の欲を抑えるのが難しいため、その生命を使って天下の生命を食べ尽くしているのです。世界中の肉食の人に供給するために、

少なくとも八百億以上の生き物を飼育しています。これほど大量の動物に水と飼料が消費され、温室効果ガスが排出されることで、さらに生態系に影響を及ぼしています。

現代科学技術が発達したおかげで、私たちは多くの情報を吸収することができるため、一層多くの人が力を合わせることで、慈悲を世界に広め、智慧を人間（じんかん）に広めるべきです。智慧は世に福をもたらしますが、聡明は欲念を追求して、手段を選ばず貪り取ってしまいます。聡明であっても智慧がなければ、愚かな行為に走り、環境を破壊したり、空気の汚染や生命の殺生によって、衆生の共業を作ってしまいます。

外に向かって追求する心を引き戻して欲念を抑え、生命を正しい方向に修正して、心に溜まった貪瞋癡を祓い清め、新たに清らかな心にすることが即ち、「大いなる教育」なのです。菜食の呼びかけには、誰が欠けてもならず、人々の心に善の清流を啓発し、その善の念と信心が清流となって人の心を浄化するのです。人類は萬物の長であり、人間（じんかん）の苦難を取り除き、あらゆる動物を庇護することができるのです。菜食を広めると、空気も大地も清められ、体が健康に、心も善良になります。皆さんの精進を願っています。（慈済月刊六五八期より）

人物誌・厦門

喜んで手を繋ぐ

あなたがしっかり歩けるように

◎撮影・范盛花、王燕玲（厦門慈済ボランティア）
文・呉春英（厦門慈済ボランティア）
訳・李曉萍（明湉）

石月英（スー・ユェイン）さんは、かつて夫の罵りに耐えられず、結婚証明書を破ったことがある。現在、二人は手をつないで善行し、夫の曽永福（ツン・ヨンフー）さんは彼女の最も心が通じ合う伴侶である。曽さんが、「彼女がいないとダメなんです！」と言えば、石さんは、「彼を見捨てることはしません！彼が元気になって、一緒にリサイクル活動することを望んでいます」と言った。

辛丑の年の春節が近づいた、ある日の午後、暖かい冬の太陽が厦門市湖里区にある蔡塘社地区の路地に差し込み、絶え間ない人通りも少なくなって、大きなガジュマルの樹の枝と葉だけがゆっくりと風に揺れていた。まもなく取り壊される蔡塘社のほとんどの店舗は既に閉店していた。六十七歳の石月英さんと

●石月英さんと曽永福さんは、結婚して45年間互いに支え合い、街のあちこちで力を合わせて資源ゴミの回収をしている。

七十歳の曽永福さん夫婦は、カートを引いて行ったり来たりしながら資源ゴミの回収をしていた姿が、その路地に幾ばくかの活気を添えていた。

一日に五〜六軒から資源ごみを回収するが、量が多い所は二往復する必要がある。幅一メートルに満たない路地で、石さんが前でカートを引っ張り、曽さんが後ろから片手でそれを押し、もう一方の手で壁を伝いながら、左足への負担を和らげて、びっこを引いて歩いていく。毎回一緒に来ても、妻に手を貸すことぐらいしかできないが、楽しく、疲れは感じない。

「こんなにたくさん有るの！」。山のように積まれた服とさまざまな段ボール箱、ラッピング袋を見て、石さんは目を細めて笑った。彼女は箱を分解して小さく畳んでから、大きい袋に入れた。片手に再利用可能な紙袋を持ち、もう一方の手で腰よりも高い袋をつかみ、引っぱって階段を降りて行くと、時折カチャカチャという音がした。

一階で待っていた曽さんは、彼女から物資の入った大きな袋を受けとって、カートの側まで引っ張って行った。そして、二人で回収物をカートに載せてからしっかりとくくりつけた。道がでこぼこで、重いカートが大きく揺れるので、曽さんは袋を手で抑えながら移動の補助をした。

路地を出て、比較的平らな村道に出ると、石さんは電話を受け取り、振り返って夫に「ここで待っていて。私が先ずこのカートを持って帰ってから、あなたを迎えに来るから。そしたらまた上の方へ行って回収に行きましょう」と言った。曽さんはうなずいて「分かった、分かった」と返答し、カートが動き出すと、「ゆっくりでいいよ」と付け加えた。そして聞き分けの良い子のように路地角で静かに待った。石さんは、人生の大半でひどく嫌っていた夫を振り返りながら、今、自分の心には感謝と喜びだけが感じられた。

リサイクル活動
呼べばすぐ来る勤さん

石さんは主婦だが、三軒の不動産を持っていて、家賃の収入があるため、生活に不自由はない。だが、慈済に入る前はひどく悩んでいた。

石さんは二十二歳で結婚した。彼女の名前に夫の実家の上の嫁と同じ文字があったことから、夫は横暴にも、女性は勤勉に家事をするのが当たり前と考え、彼女を「お勤」と呼んだ。彼女は名前と同じくらい「勤勉に」働いた。例えば、朝は暗いうちから農作業し、家事も勤勉にこなしたが、それでも夫からは認めてもらえず、関心を持たれることもなかった。

夫の曽さんは三食お酒が欠かせない人で、昼も夜も飲んでいた。外で飲み過ぎて道路の電信柱にぶつかって、額に大きなコブを作った上、電信柱に謝ったことがある。家で飲み過ぎた時は、ソファを屋外に運び出し、近所の人が不思議に思って尋ねると、「大掃除だよ！」と答えたので、近所の人々から「酒壺」と呼ばれるようになった。

石さんはいつも怒りをこらえ、泣き暮らしていた。長女が十カ月の時、彼女は夫の罵りに耐えられず、怒りで結婚証明書を破ってしまった。その悔しさと孤独感を訴える人もなく、何千万回も自分に「なぜこんな人と結婚したのだろう？」と問いかけた。

夫を避けるために、石さんは毎日家事を終えると、外出してマージャンをしたり、宝くじを買ったり、ダンスホールで踊ったりした。そのような暮らしをしても、生活の悩みは消えなかっただけでなく、ギャンブルの勝敗によって気分も大きく上下した。また、低血圧のためによく吐き気を催すほどの目眩を起こし、よくベッドから起き上がることさえできなかった。

二〇一一年の初め、同じ村の王明珠（ワン・ミンツゥー）さんが石さんを、慈済厦門支部の改装職人たちの食事を作ろうと誘った。その期間、證厳法師の「地球を守ろう」というお諭しを聞いた。その短い言葉に石さんは突然気づいた。「地球は長く生活する場所であり、ゴミを分別しなければ、間もなくゴミの山の中に住むようになる」と思った。そうやってリサイクル活動を始めてから十年が経った。

二〇一七年から今まで、石さんは六回、骨折したが、リサイクルの仕事は同じように続けた。そのうち一回は家で転んで左足の小指を骨折した。二〇一九年には肩甲骨の痛みでマッサージ治療を受けたら、マッサージ師が力を入れすぎて肋骨を骨折してしまった。その後、回収物を背負ったり、持ち上げたり、運んだりす

●曽さんは変形性関節炎を患っているため、歩くと脚が痛む。歩道橋を上り下りする時は、石さんの手をしっかりと握る。

る時、彼女は痛みで眉をひそめたので、慈済ボランティアで従姉妹の石晟治（シー・チェンツー）さんが「紙類を運ぶ時、いつも辛そうだけど、どうしたの？」と尋ねた。石さんは、従姉妹にリサイクル活動を休むよう言われるのを恐れて、本当のことを言わなかった。

去年の暮れ、彼女はリサイクル活動の時に力を入れ過ぎて再び肋骨を骨折してしまった。「お医者さんから、小さい声で話し、何事もあまり力を入れないようにと注意されました」。そう言い終わると、彼女は痛みを忘れたかように、片手でダンボールを持って行ってしまった。

「法師様がこれほど慈悲深く、地球を愛しているのを見ると、感動して涙が出てきます。行動すれば間違いないのです！環境保全の仕事はとても楽しいのです！」彼女は、慈済でリサイクルをしながら法師の説く法を学んでいる。そして、マージャンなどの賭け事の習慣は止め、一心に環境保全に没頭している。以前のマージャン仲間の蔡恋楽（ツァイ・リェンロー）さんは、「以前はマージャンに呼べば直ぐ来てくれたけど、今は来てくれません。リサイクルを頼べば、すぐ来てくれます！」と笑いながら言った。

「酒壺」から「福おじさん」になるまで

石さんはリサイクル活動や菜食することから、慈済の良さを心から感じた。もし夫に仏法を聞かせて、飲酒の習慣や気性を改めさせることができるならば、体も健康になるだろうと考えた。そこで、慈済の活動から家に帰るたびに、慈済で見聞きしたことを夫に話すようにした。

曽さんは自分の耳を指さして、「当時は話しが左耳から入って右耳から出ていって、まじめに聞いていませんでした」と言った。二〇一二年に、石さんと灌仏会の親孝行感謝活動に参加した時、その

整然として壮大な光景を目の当たりにした。そこでは誰もが笑顔を保ち、それまで感じたことのない雰囲気に包まれていた。そのようにして、慈済支部に行って野菜の栽培を手伝い始めた。ある日、土を掘り返していた時、年配のボランティアが彼に果物を持って来てくれたが、にこやかな表情をしていた。その一皿の果物が彼を感動させた。「ここの人はなんて優しいのだろう！」と感じた。それ以来、リサイクルセンターに「福おじさん」が一人増えた。かつての「酒壺」は「慈済リサイクルボランティア」に変身したのである。

曽さんは十九歳の時に左膝を負傷し、歳をとるにつれ、変形性膝関節炎になり、左脚がしびれて持ち上がらなくなり、支えがないと歩けなくなった。外出することは曽さんにとって試練となった。痛みに耐え、一歩一歩歩かなければならないのだ。

「しっかり手を繋ぐ」ことで、石さんは夫と「手を繋ぐ」だけでなく、彼の「脚」にもなっている。例えば、バスに乗る時、石さんがドアの側に立って腕を差し出し、曽さんがその腕を掴みながら乗車できるようにしている。また、バスを降りる時は、彼女が先に下りて、ドアの側で彼を待ち、自分の手で夫の体重を支えて、下車を助けている。

痩せた石さんは、夫に引っ張られてよろめき、腕にはいつも数珠や腕時計の跡がくっきり付き、痺れて持ち上げることができなくなる時もあるが、それでも夫を連れて外出する。夫と手を繋ぎ、石さんは、「彼を見捨てることはしません！私は多分前世で彼をいじめすぎて、借りを作ったのでしょう。今世では出来るだけ我慢して、彼を連れてリサイクル活動に参加します。彼が健康で、一緒にリサイクルの仕事をしたいのです」。

●城中村蔡塘社地区の道はでこぼこで、重いカートはひっくり返りそうになる。石さんが先導し、曽さんが資源物を支えて落ちないようにしている。カートの前後に寄り添った夫婦の姿が見えた。

風の日も雨の日も、外出して資源を回収する

曽さんがリサイクルと菜食を始めた時、隣人は曽さんをあざ笑って言った。「子供が親不幸だから、食べ物がないのだろう。だからゴミ拾いしているのだ」。「以前は貧しくて食べ物もなかったけど、今は生活がよくなったのに菜食するなんて、だまされているのよ」。曽さんは惑わされなかった。彼は、リサイクル活動は環境にやさしく、地球をきれいにすることであり、子孫の模範になるのだと分かっているからだ。

歩くのは不自由だが、曽さんは法師の静思語にある「何もしなければ難しいと感じ、歩かなければ、道は遠い」という言葉を忘れることはない。毎日六時半に彼は袋を持って一階まで下り、息子が住んでいる七階建てのアパートに行って、賃貸住人たちの資源ごみを回収しに行く。階段の手すりを掴んで一階ずつ上って行く。

福おじさんの歩みは速くはないが、目は遠くを見ている。夜が明け切らない時、廊下には照明がなくても、彼は階段口から、遠くに資源物があるのを見つける。彼は一歩ずつよろめきながら壁伝いに回収に行く。階段を上るのは容易ではなく、下りる時はさらに難しい。左手で壁を伝い、右手に物資を持ち、階段一段を二歩で下る。右足が先で、続けて左脚を動かす。一段下りるごとに、袋が右のふくらはぎに当たり、何回も当たると痛くなる。

早朝に集めた小さな収穫を見て、福さんは笑顔で言った。「以前は一回で搬送が終らないと二往復していました。今日は少ないですが、集めないとゴミ箱に捨てられてしまい、無駄になってしまいます。だから、風の日も雨の日も回収に行くのです」。

「彼はとても頑張っています。外出してリサイクルをしたいと

●曽さんは石さんに感謝している。「彼女がいなければ、今の私はいません。彼女が奉仕すると、私も嬉しいのです。私は歳を取っても、役に立ちたいのです」。

言うのです。何回転んだか分かりません。以前は歩くことができませんでしたが、今は大分良くなりました」。石さんは嬉しく思うと同時に心が痛む。ある日、ゴミ箱の側で資源を拾っていた時、不注意に転んでしまい、鋼管が右の腰の辺りに刺さってしまった。幸いに服が破れただけで、曽さんは立ち上がって回収を続けた。「私はもう酒壺じゃない、曽永福です！」と彼が言った。

長女の曽恵仁（ツン・フイレン）さんも父親を称賛している。「父は以前、とても気性が激しい人でしたが、今は大分良くなりました。私たちの話にもよく耳を傾けてくれ、以前のようにせっかちではなくなりました」。

しっかりした足取りで、永遠に幸福な人生に向かって歩く

街を歩き回ってリサイクル拠点に戻ると、福おじさんは座って分別を始める。彼の前には鉄類、右にプラスチックを入れるカゴが置かれ、ペットボトルを取ると右前方の集積区域に放り投げ、左足の横は様々な紙類である。石さんは時折、回収資源を彼の側に置き、資源に囲まれたことで、彼は手際よくなり、リサイクルのスピードも上がる。

夫婦の間に会話は多くないが、石さんはいつも彼に何をすべきかを知っている。曽さんは、「彼女がいないと生きて行けません！」と言った。石さんは微笑んで長い間、世話をしてきた子供のような老人を見て、「ごみのような私たちの家庭をリサイクルしてくれた法師様に感謝したいのです」と言った。

石さんの携帯が鳴り、隣人が回収物を取りに来てくれるよう頼んできた。石さんが何も言わない前に、曽さんは立ち上がって、出発の準備をした。

人の背の高さほどもある回収資源を積んだカートを引いて、石さんは水を飲む暇もなく、荷物を降ろすと再び回収に出かけ、結局、五往復した。額の汗を拭いながら、「リサイクルは苦労ではありませんよ。やることがない方が心配です！」。環境保全の仕事が以前の耐え難い生活を変えてくれ、喜んで奉仕する幸せを見つけた。

夕日が傾き、夕焼けの光が蜘蛛巣のように張り巡らされた電線を通り抜けて、蔡塘社地区の路地に差し込み、でこぼこの道を照らした。二人のお年寄りはカートを押しながら手を繋ぎ、揺るぎない心でもって、テンポの異なる、しっかりした足取りで進んでいた。静かな村道に笑い声と、カートの「ゴトゴト」という音との合奏がこだました……。

（慈済月刊六五三期より）

コロナ特別報道

インド（上）

爆発的なインドのコロナ禍・国境を超えて

ひと呼吸の間にある命を救う

◎文・葉子豪　写真提供・花蓮本会　訳・惟明

⬆防護服と医療用キャップ、シューズカバー等の物資が5月末にネパールのカトマンズに到着した。

インドは五月には新規感染者が九百万人を超え、新型コロナのパンデミックが起きてから、最も苛酷な状況にあると言える。悲劇はこれだけではない。周辺各国にもウイルスが蔓延し、医療機関は酷い「酸欠」状態にあって、患者の命が今にも消えようとしている。この危機的状態を救わなければならない。

今年半ばまでで、台湾の累計感染者は一万一千人を超え、感染の拡大で警戒レベル3が延長された。だが世界的に見ると、その時感染状況が最も厳しい国は、南アジアのインドであった。

インド政府の公式発表によると、今年五月の一カ月間だけで九百二万人の新規感染者があり、約十二万人が亡くなっているそうだ。ピーク時には、一日に四十万人を超える新規感染者が確認され、不幸にも一日の死者は四千人余りに及んだ。新型コロナが発生して以来、世界で最も劇症的なものだと言える。

ウイルスの変異株による感染は急速に拡大し、四、五カ月で医療体制を崩壊させてしまう。例えばブッダガヤ、サールナート、霊鷲山（りょうじゅせん）そして隣国のネパールのルンビニ等を含めた幾つかの仏教聖地もどれ一つとして逃れられなかった。首都ニューデリー、ムン

バイ、コルカタ等の大都市は軒並み重被災地になった。ウイルスは各州に広がり、十三億の国民に危機が迫り、世界中の感染防止策の勝敗に影響を及ぼしかねない。

インドは世界最大の新型コロナウイルスワクチンの生産国で、コバックス（ＣＯＶＡＸ）が確保したワクチンの大半はインド産である。感染者と死者が急増し、ワクチンが大幅に不足する中、インド政府は国内産ワクチンの輸出を制限した。ワクチン取得をコバックスに頼っていた百以上の国々にとって、感染防止が瞬時に「丸腰」状況に陥った。従って、ウイルスに勝つ為にはインドが直面している危機的状況を無視することはできない。

慈済は台湾本土を守ることに力を注ぐと同時に、インドと近隣のネパールやスリランカ、カンボジア、バングラデシュ、ブータン、ラオス等七カ国への援助を増やし、時間と争って救命物資を感染の重被災地に届けている。

インドに「酸素を供給」し、呼吸不全を助ける

「近頃、感染と疑われる患者を毎日二百五十から三百人受け入れていますが、その内、約百五十人はＩＣＵに入院すべき人たちです。しかし、毎日無事に退院できるのは二、三十人で、医療機関はとても重い負担を担っています。今最も必要なのは酸素濃縮機です」。

慈済大学の姉妹校であるインドのスリ・ラマサミー・メモリアル大学附属病院のラビクマール院長(Dr. Ravikumar)は、インターネットを通じて助けを求めた。コロナ禍がピークに達した時、重症患者が激増し、医療用酸素が供給不足の危機に陥っていたことを訴えた。医療機関は酷く「酸欠」しており、多くの人が呼吸困難に陥った多く家族を救う為に大金をはたいて、闇市場から製造経路不明な酸素ボンベを買っていたが、お金がなかったり、買えなかった人は家族が苦しみながら死んでいくのを見守るしかなかった。

コロナ禍での一幕一幕の死別のシーンが最も人心を苦しめるものになっている。重症患者の差し迫った状況下で、今にも消えそうな命は形容し難く、命は呼吸を一回する間にあると言える。

インドとその周辺諸国の差し迫った要請に応じて、慈済は七カ国の八十八を数える宗教、慈善、医療関係の機関に酸素濃縮機、酸素ボンベ、人工呼吸器等を提供した。また、病院用酸素貯蔵タンク十個を支援する予定である。買い付けと輸送を担当する慈済チームにとって、これらの医療器材や設備は専門領域ではないが、幸いにして、肝心な時に指示してく

国境を超えて整える　支援の調整

コロナ禍の中での国を超えた支援で、花蓮静思精舎は5月3日から毎日対策会議を開き、各国の支援の進度やニーズに対する査定などを検討している（写真下）。7カ国への支援物資は海外の慈済ボランティアが買い付け、発送を行なっている。シンガポールの慈済ボランティアが医療物資をコンテナに積み、カンボジアへの発送を準備していた（写真左上）。5月末の休日に慈済の支援物資がネパールの空港に到着し、現地政府は、現地の慈済ボランティアがその場で荷物を通関して受け取ることを特別に許可した（写真左下）。

れる専門家がいた。

呼吸困難に陥った患者は数分間の酸欠で死につながる可能性があるため、病院では二十四時間酸素を供給し続けなければならない。病院用の酸素貯蔵タンクには超低温で液体酸素が保存されており、使う時に解凍して気化させ、パイプで各病室に送られる。買い付けも使用も医療の専門領域に関わるため、支援チームは慈済医療志業の林俊龍（リン・ジュンロン）執行長から指導を受け、各病院の病床数とその他のニーズに応じて、適した設備を買い付けた。

「四十七リットルの酸素ボンベ六百本を調達してくれた高雄の侯哲宏（ホウ・ジョーホン）さんにとても感謝しています。また高雄ボランティアの潘機利（パン・ジーリー）さんと黄建忠（ホワン・ジエンジョン）さんが連絡を取ってくれたことにも感謝しています」。インド支援の責任者である慈済国連事務活動チームの黄静恩（ホワン・ジンエン）さんによると、五月上旬にインド国際仏教連盟（ＩＢＣ）から、酸素ボンベ二千本を急いで調達して欲しいという要請があったそうだ。高雄で医療器材や化学薬品、一般金属製品の卸売業を専門的に営んでいる侯さんが、慈済の行動を理解してくれたことから、一刻を争う救命のために、直ちに調達できる酸素ボンベを全て回してくれた。

六百本の酸素ボンベを海運でインドの首都ニューデリーに素早く届けるために、侯さんと職員たちは五月中旬から点検を始め、残業してやっと予定通り五月二十四日にコンテナで出荷し、六月初めにインドに届けることができた。任務を終えた後は皆疲れ切っていて、「もう駄目です」と言ったものの、手伝うことができ

●慈済の配付活動に協力した南インドのサラジャー寺院は、緊急に防疫物資を必要としていた。５月中旬に慈済が寄贈した防護服、消毒スプレー、医療用手袋、パルスオキシメーター、医療用マスクなどを受け取った。

たことで、心に喜びが溢れていた。

酸素ボンベのほか、酸素濃縮機の買い付け準備と輸送も素早く進められた。五月末までに慈済は、既に一千台をインドに送り届けた。その内の二百台は西部の大都市ムンバイに送り、地元の慈済ボランティアであるプラヴィンさんが受け取った。更にその内の二十台を東北部の大都市であるコルカタにある神の愛の宣教者会（Missionaries of Charity）に、八十台を南インドのスネハ公益財団（SNEHA Charitable Trust）に送り、残りの百台は現地の仏教団体ＡＢＭサマジ・プラボーダン・サンスタが運用した。「先方は受け取った後、祈りの会を設け、仏教が皆に更なる力を与えてくれるようにと祈りました。ボランティアのプラヴィンさんも現地の仏教関係の人や実業家に、『菜食でなければならない』という證厳法師の理念を伝えていました」と、黄さんが付け加えた。

カルナータカ州ベンガルール市では、現地ボランティアのギリシュさんが一個人の力で、貧困者に対する配付活動を行なった。今年、第二波のコロナ禍が発生した時、彼は自費で酸素ボンベを購入し、酸素供給ステーションに行って列に並んで充填してもらった後、無償で貧しい病人に使ってもらった。彼は六月初めに、慈済が提供した十台の酸素濃縮機を受け取り、慈善事業をしている人が寄贈した発電機を使って早速酸素供給ステーションを立ち上げ、人助けできるエネルギーを一層大きく発揮した。「少しずつ、現地にいるボランティアも立ち上がりました」と、慈済基金会の熊士民（シオン・シーミン）副執行長がホッとして言った。

インド最南端にあるタミルナドゥ州に送られた二百台の酸素濃縮機が、現地政府と人々に熱烈に迎えられた。現地の議員が自ら出迎えただけでなく、民間の有識者も慈済に対して、確実に酸素濃縮機を最も必要としている病院に届けることを確約した。「彼らは慈済ボランティアではありませんが、證厳法師と慈済が何をしているのかを知っているというだけで、私たちに協力することを決めたのです」と黄さんが感動しながら語った。

患者のケアの為に、神に仕える人たちは志願して病院に入った

実のところ、対インド支援は二〇二〇年四月という早い時期から始まっていた。三月からの第一回目ロックダウンが延長を繰り返され、社会的福祉が行き届かない人々は手が止まれば食糧も止まるというように、生きていくことができなくなった。「己の無私を信じ、人に愛があることを信じる」という信念を携えて、

慈済はインドでの食糧支援活動における大部分の調達、買い付け、配付等の事務を、現地の「神の愛の宣教者会」や「カミロ修道会」、「チベット仏教寺院」等の組織の聖職者やボランティアに委託して、現地に行けない慈済ボランティアの代わりに、支援物資を弱い立場の貧困者に配付し、感染予防物資を医療の最前線に届けてもらった。

貧困救済用の米、油、塩などの食糧とマスクなど個人の感染防止用品は一世帯が一カ月生活できる量を基準にしている。今年四月迄、食糧支援で延べ十九万世帯の約九十四万人が恩恵を受けた。

今年四月、インドは第二波のコロナ禍が襲い、貧しい人々は去年にもまして生活が苦しくなった。修道女と神父たちは自分たちの生命の危険をも顧みず、街角や病院で日々、貧しい人と病人の世話をしている。

「これほど感染状況が酷いのに、あなたたちは何故、街角を歩き回るのですか？」

「私たちが貧しい人を助けなければ、誰が助けるのですか？やれるだけやって、寿命が来た時は、神の元に帰ります。最後の一息さえ残っていれば、毎日を上手に使って貧しい人を支え続けます」と数千キロの彼方にいる慈済ボランティアの質問に対して、神の愛の宣教者会の修道女たちの答えは人々の心を動かした。

同じように、南インドのカミロ修道会のメンバーたちも、何時でも犠牲になる心の準備ができている。今年四月下旬、神父と修道女の第一陣が、慈済が寄贈した防護装備を着用して、ケア活動のために感染者で溢れた病院に入り、最前線で働いている医療従事者の支援を始めた。

「彼らは患者に食べさせたり、掃除をしたり、そして遺体の処理までします。病院に入る前に厳しい訓練を受け、一人ひとりが中華系の人の間で言われる『生死状』のように、全て志願によるという誓約書を書かなければなりません」。同会の神父や修道女及び青年ボランティアは、自ら困難な医療現場で患者に奉仕しているが、連絡を担当している黄さんは心配と切ない気持ちで一杯になった。「一度入れば出て来ない」という彼らの覚悟を聞いた證厳法師は、「それはいけません。出てくるチャンスを与えなくてはいけません…一人たりとも欠けてはいけません」と声を詰まらせて言った。

五月十七日、同会から嬉しいニュースが届いた。第一陣グループの四十人の神父、修道女及びボランティアが三週間にわたる二つカトリック教病院における第一線での任務を終えて出てきた。第二グループが続けて三つのカトリック教病院に入り、六月上旬までに、何人かの感染

者は出たものの、無事に帰ってきた。「宗教の垣根を超えた慈済の支援には、ただただ感謝と感激しかありません。法師様と慈済ボランティアが、宗教に関係なく、ひたすらインドカミロ修道会を支えてくれたことに感謝しています。カミロ修道会は法師様の期待を裏切らないように、インドでもっと多く人々に仕えるだけです」と同会のバビー神父（Father Baby Ellickal Mi）からのメッセージに書かれてあった。

「医療スタッフ、聖職者に関わらず、第一線に立てば、彼らは鎧（防護服）を身につけ、このような戦いに投入して、より多くの患者を守っているのです」。同じ志を持つカトリック教の仲間について言及した時、同じく国際援助を担当している静思精舎の德宸（ドーチェン）師父（スーフ、尼僧への敬称）は、法師の慈悲深いお言葉を伝えた。「最前線にいる人たちに充分な防護物資を与え、彼らが他人のケアをすると同時に、自分たちの健康も護らなければなりません」。「法師は、世界中の慈済人がこの第一線にいる人たちに感謝し、彼らを励まし、祝福し、そして最善の支援を与えるようにと、言われました」。（慈済月刊六五六期より）

（続く）

★ ベトナム

防疫模範生が焦眉の急を告げる

今年の上半期、慈済ベトナム支部は六千九百世帯余りに支援物資を届けた。普段なら困難なことではないが、コロナ禍の下では実に容易なことではない。ボランティアが感染者でないことを保証するために、体調報告をしなければならない。車の乗車人数も定員の半数を超えてはならず、彼らが接触する人々にはマスクを持っていない人もいる。ボランティアが外出しなければならない理由とは何だろう。

文・葉子豪　撮影・慈済ベトナム支部　訳・荳荳

二〇二一年四月、アジアのコロナ禍は再び爆発的に厳しさを増し、東南アジア諸国の中で九千八百万人の人口を抱えるベトナムは、四月下旬に感染がピークに達した。六月中旬時点で、累計感染者数が一万人を超えたが、人口比で

見ると、他のアセアン諸国と比べたらまだ「優等生」とも言えた。近隣諸国と比較してはるかに低い比率を維持できた理由は、政府の断固としたコロナ対策にあると言える。感染者が出た地区は直ちにロックダウンを実施したり、工場を閉鎖した。また感染者は直ちに病院に移送して治療を受けさせ、他の住民は外出自粛をして自宅待機し、再び解除されるまで政府が物資を届けるようにしている。

このような厳しい隔離措置は、感染拡大を断ち切る効果があり、感染者数も低い比率を維持できたのである。しかし、経済や国民の家計に大きなダメージを与えた。困難を共に乗り越える日々の中で、歯を食いしばってやり過ごす人もいれば、それを続けることができない人もいる。

「二〇二〇年から現在に至るまで、私だけでなく、全ての人の生活が覆されました。多くの企業は倒産し、人々は職を失い、どこへ行っても感染が心配になり、皆がパニックに陥ってしまったのです」。外資系企業に勤めているグエン・ティ・ル・ホアさんはこう語った。ホーチミン市で再び感染が確認されると、政府高官は、現地の工場従業員は近隣のタイニン省の工場に出勤してはならないという命令を出し、送迎バスも運行休止になった。

財務および経理の責任者である彼女は

在宅勤務になったが、誰もがそうできたわけではない。「昨年、感染が拡大して以来、会社は運用コストを削減するために、従業員の五割を解雇しなければなりませんでした。他の仕事が見つかる人もいれば、見つからないまま失業手当を受け取るしかない人もいます」。

場所と回数を増やして配付する

元々、比較的弱い立場にある家庭以外にも、コロナ禍で生活が困難になる人は増え続けている。ベトナムの慈済ボランティアは、政府と共に生活支援物資の配付を開始した。今年一月から五月にかけて、ボランティアはハイズオン、タイニン、チャーヴインの三つの省と南部の大都市であるホーチミン市で支援活動を実施し、六千九百世帯余りの生活困窮家庭に食糧を配付した。

これら支援活動は、実際に実施してみると、複雑で細かく、状況がよく変わる。特に感染が拡大して以来、ベトナム政府は市民に、マスクの着用、消毒、体調報告、ソーシャルディスタンスの維持、密を避けることを厳しく要求した。ベトナム語表記の頭文字を取った「5K」政策である。慈済ボランティアにとって、配付する時に密にならず、ソーシャルディスタンスを維持することは、思うほど容

易なことではない。

「一月の時、合計六回の配付活動を計画したのですが、二回配付しただけで、感染が拡大し、全ての手順、時間、場所の変更を余儀なくされ、再通知しました」。ベトナム連絡所の責任者である陳大瑜（チェン・ダーユー）氏によると、当初、二日間で終える予定の大規模な配付活動を、政府の要請に合わせて、多数回の小規模な配付に変更し、一週間かけて完了したのだという。

ベトナム政府機関は、防疫のために時差出勤を採用したため、行政人員が減って、支援世帯の名簿作りにも影響が出た。行政スタッフが提供できる情報は、往々にして世帯数と世帯主の個人情報のみで、世帯人数や年齢、性別などの詳細な情報がない。

これらの問題に対して、慈済は臨機応変に対応し、一世帯を三人と考えた量を基準とした。陳氏は、ベトナム人の米食習慣に応えて、各世帯に十キロの米を用意した。白地に菩提樹の葉をデザインしたロゴと青い文字の「TZUCHI」が印刷された米袋から安心感が伝わった。また、ボランティアは、食用油一瓶、マスク一箱、調味料一パック、塩二パック及びインスタンラーメン四袋が入ったセットを準備した。

米と食品のセットは、三人家族ならば一カ月、五、六人家族なら、少なくとも十日か半月は心配することなく暮らすことができる。平日に日雇い労働で生計を立てていた人々が、困窮状態にあっても十分な食糧を得ることができれば、生活のストレスを軽減できる上、生活のために頻繁に外出する必要がなくなり、感染の可能性も低くなる。

物資の配付に加えて、慈済は低所得世帯の学生に就学支援金を支給し続けている。以前は、ボランティアが各県や市に支給拠点を設けていたが、コロナ対策に

ベトナムの慈済ボランティアは今年1月、タイニン省友好協会と協力し合って、貧困家庭1世帯当たり10キロの米と物資セットを寄贈した。

応じて、自治体と相談した結果、密を避けるために、複数の会場を設けて行うことに変更した。「たとえば、ハイズオン市では十一カ所、タインハ県で八カ所、トゥキー県とタインミエン県でそれぞれ六カ所の会場に分かれて行いました」。

今年の五月中旬にベトナム北部ハイズオン省で行われた就学支援金支給活動で、二十年のベテラン現地ボランティアのタティレンさんは、これはハイズオンの人々にとっての一大祝福であると言った。首都ハノイに近いハイズオン省では、今年一月に感染者が急増し、住民が故郷で規制を受けただけでなく、近隣の県や市でも厳しいコロナ対策が取られ、同省を出入りする人の流れと物流が規制を受けたため、省内の農産物の販売が滞った。

政府は、ソーシャルディスタンスを保つことに加えて、企業の従業員全般にスクリーニング検査を義務付けた。そして、検査の結果が全員陰性でなければ工場の稼働は認められない。また、輸送規制により原材料が入って来ないことから、商品も輸出ができなくなり、強行な防疫措置で、多くの企業が経営困難に直面している。

学校は暫時、休校になっているが、就学支援金は依然として重要な支援に変わりはない。陳氏は当初、ホーチミン市から北側にあるハイズオン省に向かって、就学支援金を配付しに行くことを考えていたが、協力関係にあった政府機関がそれを知った後、彼にそこには行かない方がいい、と言った。そこで、彼はハイズオンでの活動を現地ボランティアに託した。

防疫規定に応じて、「5K」原則を守り、配付回数を増やしたため、完了までの時間が長くなった。二百十五人の小学生に一人当たり百万ドン（約四千円）の支援金を配付し、三百六十四人の中学生と百三十二人の高校生にはそれぞれ、一人当たり百六十万ドン（約六千円）と二百万ドン（約七千七百円）の支援金を配付した。これら支援金は、長年支援を受けてきた学生たちにとって、適時の雨のようなもので、努力を積み重ねてきた彼らは、これで学校を中退しなくてもよくなった。

「学生はこのお金で授業料の一部を支払うことができるので、今後、学校に行くことを心配する必要はなくなりました」とタティレンさんは嬉しそうに言った。

まだ「外出」できる時間を無駄にしない

慈済ボランティアは、防疫物資を主にカンボジア国境と接するベトナム南部で

奉仕している国境防疫隊を対象に、赤十字社や友好協会を通じて、医療用マスク、手袋、防護服、ゴーグル、額式体温計などを最前線の防疫スタッフに寄贈した。これら必要最低限の物に加えて、ショルダータイプの消毒スプレーとソーラーライトも提供した。「国境に近いので、場所によっては電気が通っていないのです」と陳氏が付け加えた。

「これら防疫スタッフは、主に密入国者を取り締まっています」。陳氏によると、隣国カンボジアのコロナ禍がより深刻なため、国境防疫スタッフが増強され、それにつれて防疫物資の需要も増している。

慈済基金会のボランティアは、4月にタイニン省（上）、5月にハイズオン省（下）で就学支援金を支給した。彼らは政府の防疫規制を守り、誰もが1メートル以上のソーシャルディスタンスを保った。支援を受けている子供も紙の筒を受け取って善念を発揮した。

慈済ボランティアはもっと現地のために何かしたいと思っているが、深刻化するコロナ禍による厳しい政府の規制に直面して、今後の活動を慎重に検討する必要がある。四月下旬に感染が拡大した時、多くの訪問ケアや調査日程が中止を余儀なくされたが、幸いなことに、誰もが機会を逃さず、まだ「外出できる」間に多くのことを成し遂げた。

「村人たちが物資を手に取って、喜び

の涙を流しているのを見た時、とても感動しました。證厳法師が私たちに、村人と良縁を結ぶ機会を与えてくれたことに心から感謝しています！」法喜に満ちた慈済ボランティアのグエン・ティ・ル・ホアさんはホーチミン市の法縁者たちを励まし続けた。「政府は密にならないよう求めているので、リサイクル活動は延期しましたが、毎月ボランティアはいくつかのグループに分かれて、ケア世帯を訪問し、生活状況を尋ねたりして、この危機を乗り越えられるよう支援しています。私たちはまた、毎週火曜日と水曜日の夜に、オンライン読書会に参加するよう呼びかけています」。

ベトナム北部のハイズオン省のタティレンさんは、長年にわたる南部の法縁者の支えに感謝するだけでなく、法師の法に学び、縁を把握してできることをしている。彼女は、慈済五十周年の時、あるボランティアが共有した言葉をよく覚えている。「法師は細い肩で、世の中を支えているのです！私たちが菜食を広め、より多くの人に慈済を知ってもらい、愛の心を集めてより多くの人を助けましょう！」。

慈悲済世は世界中の慈済ボランティアの本分である。今、彼らの活動が一時的に制約され、特に五月末以降、ベトナムは再び変異株による新たな感染の波という試練に直面しているが、法師の「現地で得て、現地に恩返しする」という教えでもって、慈済人のベトナムでの奉仕とケアは、引き続き根を下ろして、拡大している。（慈済月刊六五六期より）

コロナ禍の一年を振り返って

・ベトナムはコロナ禍を四波経験しており、一波ごとに感染が速くなっています。ホーチミン市の全ての学校は一時的に閉鎖され、私の息子も寮から家に戻ってオンライン授業を受けています。私の両親は高齢で、体の抵抗力が弱いので、私たち一家は人と接触しないよう外出を避け、家では部屋を清潔に保ち、簡素な食事をして運動で体を鍛え、そして周りの人が皆平穏無事でいることに深く感謝しています。

・私は毎晩大愛テレビ番組の「人間菩提」を見て、法師の開示を聞き、恐怖心を行動に変えています。この期間、誰もが苦労していますが、もっと奉仕して、もっと多くの人に菜食を呼びかけ、共に感染が終息することを祈ることです。

——ホーチミン市慈済ボランティア、グエン・ティ・ル・ホアより

シンガポール

異国の地で頑張る人々が パッチワークで故郷への思いを紡ぐ

文・張郁梵　写真提供・慈済シンガポール支部　訳・御山凛

シンガポールには、コロナウイルスの感染者が六万以上いるが、その九割を占めているのが海外からの「ゲストワーカー（外国人労働者）」である。彼らは国の建設を支えている重要な人たちであり、政府は検査、治療また隔離施設を提供している。慈済は各種の活動を通して、異なる民族間で互いに支え合い、困難を乗り切れるよう導いている。

国連アジア太平洋経済社会委員会（ESCAP）は二〇二〇年、アジア太平洋における外国人労働者に関する報告書に、各国に対して「外国人労働者」を新型コロナのワクチン接種計画に組み込むよう呼びかけた。彼らは、比較的容易に高い感染リスクに晒されてしまうグループに属しているからである。

グローバル経済の中で、その競争力が上位にあるシンガポールでは、国民と長期在留資格を持つ人にはワクチンを接種する権利がある。では国内にいる「ゲストワーカー」と呼ばれる外国人労働者はというと、異国の地で永遠にゲストとして扱われるのだが、このほどワクチン接種プロジェクトに組み込まれることになった。シンガポールでは、昨年一月にコロナウイルスの感染者が確認されると、政府は直ちに、接触確認のための行動追跡アプリと来客登記システムを国民に提供し、その卓越した検疫効果はハーバード大学疫学専門家から絶賛された。しかし、三月末に大規模なクラスターが発生し、その多くがゲストワーカーの宿舎で起きていた。それにより、政府は緊急にロックダウンに似た「遮断措置」（Circuit Breaker）を発令した。人々はほとんど在宅授業や在宅勤務をすることになり、飲食はテイクアウトだけに限られ、そして、全国に在住する約三十万人のゲストワーカーに対して検査や隔離が行われた。

今年五月に再度コロナの感染者が確認され、政府も厳しい規制措置を実施した。政府が、二度目のゲストワーカーの宿舎に対する検疫隔離強化措置を取って二週間も経たない五月十七日の朝、慈済人文青年センターは、政府の人材開発省から、慈済が去年から行なっていた「ステイホームキルト～囲いの中で綴る」(Stay Home Quilt) プロジェクトの精神でもって、ゲストワーカーの心の健康を手伝ってほしいという主旨の電話をもらった。

「正しい」ことをする

政府はゲストワーカーに対し、治療費、隔離施設、食事さらには、給料まで提供していたが、国民が通常の生活や経済活動を再開されても、ゲストワーカーは依然として行動を制限され、食事は部屋の前に届けられ、隣の部屋へ行くことも禁じられていた。そして、数カ月に一回外出できる時には、雇い主が彼らを車で政府の指定した憩いの場所や郵便局、送金、日用品の買い出しに連れて行き、それ以外の時間は、毎日、「宿舎」と「工場」を往復するだけの生活をしていた。自由に行動できるとまでは言えないが、それでも部屋を出て、外の新鮮な空気を吸うことができるので、彼らは十分に満足している。

慈済シンガポール支部は去年11月、「ステイホームキルト～囲いの中で綴る」展示会を開催し、数多くのゲストワーカーが縫い上げたパッチワーク作品や心温まる交流の写真などを展示し、異なる民族間の交流を深めた。

慈済は半年以上、ゲストワーカーのケアをしている。内容としては、感染者の宿舎の用意やマスク、生活物資、オンライン講座、励ましの活動などを提供している。中でも、「ステイホームキルト～囲いの中で綴る」は

去年、慈済シンガポール支部が芸術団体や企業と共同で始めた芸術プロジェクトである。「囲い」とは、コロナ禍で宿舎が囲いのような存在になり、彼らが長期間、故郷を離れて働きながら、家族を思い続けていることを意味している。その活動のホームページに申し込めば、慈済人文青年センターから針や糸、ボタン、生地などが入った裁縫セットが届くので、自分のアイデアを活かすこともできるし、「裁縫」によって心を落ち着けることができる。

「故郷への思いをパッチワークに縫う」だけでなく、慈済人文青年センターは去年、五百五十人のゲストワーカーと一般市民にパッチワークの作品を提供してもらい、芸術家の王文清さんが集った作品を縫い合わせて「家」を象徴する芸術品を創作した。コロナ禍が落ち着き始めたことを機に、慈済人文青年センターは展示会を催し、鑑賞や交流に地域の民衆やゲストワーカーを招待した。この活動は当時、社会でも大きな注目を集めた。

慈済人文青年センターマネージャーの林杏純（リン・シンジュン）さんによると、この企画は大量の回収資源を使っており、布地もボタンもエコステーションにある古着から切り取ったものである。

ボランティアとゲストワーカーの器用な手により、役に立たないものや捨てるには勿体無い古着に新たな生命が吹き込まれただけでなく、社会で立場の弱い人々と芸術とを結ぶという高いレベルの役目を果たし、彼らに寄り添うきっかけとなった。今年は政府招待の下、慈済人文青年センターは異なるＮＰＯ団体と共同で企画し、オンライン講座や芸術工房、裁縫、詩の朗読などさまざまな活動を通してゲストワーカーのケアを行なった。

慈済シンガポール支部も積極的にゲストワーカーセンターと連絡を取り、ボランティアが宿舎に入ってケアをしたり、ストレス解消の活動や講座を開催したりした。「あなたはこの四カ月間で、ルームメイト以外に私が初めて会った人です！」これは、林さんが宿舎ケアをした時に、インド国籍のゲストワーカーが彼女を見て発した第一声である。相手の興奮した様子に、林さんは思わず目頭が熱くなったことを覚えている。彼女は、その言葉で心が揺り動かされただけでなく、「自分がしているのは正しいのだと感じました」と言った。

この一年余りで、シンガポールのコロナ感染者は六万二千人余りに上り、その八～九割がゲストワーカーである。従っ

て、ボランティアが宿舎ケアする時、緊張を伴う。防護フェースシールドの下に四層のマスクを着ける人や感染を避けるために五時間もお手洗いに行かない人もいる。

「たとえ感染防止を徹底していても、自分が感染していない保証はありません！」林さんが一番感動したのは、ボランティアは感染を恐れていても、勇敢に宿舎に行っていることである。それは、心細いゲストワーカーに温かさを届けたい一心であり、活動の後、ボランティアは「こんなに近くでゲストワーカーと交流したのは初めてです！」と感想を述べた。

隔離生活を孤独なものにしない

シンガポールは遮断措置を去年四月から六月まで実施した後、徐々に緩和したが、その期間中、慈済が定期的に行なっていた以前からの長期ケア活動は停止を余儀なくされたため、ボランティアは百世帯余りの老老介護や一人暮らしの弱者世帯に対して電話訪問を続けた。その過程で多くの人が感染防止用物資を購入することができず、繰り返し医療用マスクを使っていることを知り、慈済シンガポール支部は「安心祝福セット」を用意した。中には非常食、マスク、ハンドソープなど防疫物資が入っている。また同時に特殊な対応を必要としている人には、車椅子やベビー用品などを提供した。

経済的に困難な状況にある世帯の、生活でのストレスを緩和すると同時に、政府の感染防止のための遮断措置に呼応して、あらゆる物資の配送を、運送業に勤めていてコロナ禍で生計に影響がでているボランティアやケア世帯に委託した。慈済シンガポール慈善志業発展室副主任の呉麗瑩（ウー・リーイン）さんの説明

「ステイホームキルト」の企画が始まると、近くの住民やゲストワーカー、ボランティアが絨毯を作り、多くの人による縫い合わせで、「家」を象徴した。

によれば、遮断措置期間中、貨物の運転手のような政府の許可を得ている職業だけは行動が制限されていないとのことだった。そこで、「仕事を与えて救済に代える」方式を使えば、物資を必要としている人の元へ届けることができる上、支援を受ける人が人助けする側になり、奉仕することで達成感を得ることができるのである。

呉さんはこう話した。ある中年女性は、自分が外に出て感染すれば、療養中で免疫力の低い夫に感染させてしまうかもしれないと恐れ、毎日家から一歩も出ず、余りにもストレスが溜まったため、窓から大声で叫ぶことでストレスを発散していた。ボランティアが電話をした時、女性はもう長い間、パンを口にしていないと言った。その晩、同じ地区に住んでいるボランティアが、一斤の食パンを彼女の家に届けた。

ボランティアは、女性がパンを受け取った時のことを思い返し、子供のように小躍りして感謝の気持ちを表す彼女にびっくりしたと話した。「私たちにとって容易に手に入るパンが、その女性にとっては、天からの恵みのように映るのです…」。呉さんは、コロナの影響で人と人の交流やソーシャルディスタンスを絶ってしまったが、本来は何気ない日常の行いが、人々の心に温もりを届ける小さな幸せになっている、と言った。

（慈済月刊六五六期より）

コロナ禍の一年を振り返って

・誰もがマスクを必要としている時、布マスクとマスクカバーを作成した。当初は五百個の計画だったが、最終的には五万個縫いあげた。ゲストワーカー宿舎でクラスターが発生したため、ケア活動を展開した。社会に必要なことは率先してやる！

・自分の出身や民族にかかわらず、同じようにシンガポールにいるのであれば、一緒に乗り越えなければならない。その道は険しくても、進み続けるというポジティブで楽観的な生き方をしたことで、この一年は充実し、感謝に満ちた年になった。

——慈済人文青年センターマネージャー林杏純（編集・彭潤萍）

愛は一切を成就する

◎文・釋徳仉／訳・済運

心に愛があれば、不満を感じることはありません。
喜んで奉仕するのは心の豊かな人です。

愛を大きくして、道心を広くする

モザンビークと慈済は特殊な縁で結ばれています。二〇一九年のサイクロン・イダイ被害が発生する前、蔡岱霖（ツァイ・ダイリン）師姐（スージエ）と夫のディノ師兄（スーシオン）は長年、南部のマプトで慈済志業を広めることに努めてきましたが、陳春發（チェン・チュンファー）師兄が「慈済の家」を建てるための土地を寄付したことで、数多くの現地ボランティアを精進の道に導かれました。そして、現地がサイクロン・イダイに襲われた後、慈済は緊急支援から中長期支援まで、途切れることなく中部の被災地であるニャマタンダ郡をケアし、慈済の種子を根付かせ、今その花が咲いて実を結んでいるのです。

二十二日のボランティア朝会で上人は、慈済が善意を啓発する話をしました。それは現地でこれほど多くの善良なボランティアを集めることができたことです。これほど多くのボランティアから愛の力が結集し、荒地を開墾して野菜や食物を植え、貧困救済や災害時に貧困者や病人、障害者、お年寄り、飢えた子供たちに提供することができるのです。ボランティアの多くも貧困者ですが、皆、心身の限りを尽くして奉仕することを望んでいます。支援を受けることから自力更生し、人を支援する人になっています。これは全て心の持ちようを変えたことから始まったのですが、慈済人の熱心な導きと教育も必要でした。

「モザンビークのボランティアは屋外で勉強会に集まった時、地面に一本の線を引いて、それに沿って靴をきれいに並べ、その内側に座って熱心に話を聞いていました。私はそれをみて大いに感動しました。屋根のない教室でも、彼らにとっては神聖な心の殿堂なのです」。

ソファラ州の若い現地ボランティアであるポールは、メティチュラ村初めての慈済ボランティアで、現地の大愛農場の管理を任され、仏法を広めると発願しました。「彼は体で静思語の道理を実践し、心に感じることが多くなり、使命感を持ってからは、見知らぬ人でも親しく挨拶しています。子供を背負い、手に荷物を持っている女性を見かけると、駆け寄って荷物を持ってあげ、歩きながら慈済の話や静思語を分かち合うのです。これこそ法を求めようとする心であり、体で実践すると同時に、弘法して衆生を利しているのです。《法華経》でもそう言っています。法を聞けば、説法して、伝法しなければならず、善道を歩むと共に、それをより広く開拓して人々を導くのです」。

上人は、皆が愛でもって行動していることを賞賛しています。人同士が互いに助け合えば、生きていけないほどの苦難はなくなるのです。「私たちの人助けは、直ちに豪華で頑丈な家を建ててあげるのではなく、一歩ずつ彼らに付き添って進み、彼らに知識と善行による希望が増えていくよう導くことにあるのです。自分の生活が改善されることだけを望むのは、欲望であって希望ではありません。モザンビー

●モザンビークの現地ボランティアが大愛農場で野菜の収穫をしていたが、奉仕すれば、収穫が得られ、人助けもできる、という喜びに浸っていた。
（写真の提供・慈済モザンビーク連絡所）

クのボランティアは人々の考えを変えて、生活を改善し、社会全体をより良くすることを誓いました。この発心こそが善念なのです」。

「人は愛さえあれば、自分が貧しいと感じることはありません。人に奉仕することができれば、非常に富める人だと言えます」。上人はこう言いました。現地ボランティアが農地を耕して自給自足できる上に、人助けもできるようになったのです。ビデオの中で、彼らが慈済の歌を作物収穫の替え歌にして歌っているのを見て、彼らのとても楽しい気持ちを感じ取ることができました。慈済はさらに一歩踏み込んで、彼らに頑丈な学校を建ててあげ、子供たちに一貫した教育を受けさせたいのです。未来の社会に希望が現れ、世代ごとに益々良い方向に向かえば、モザンビーク全体の環境を改善できるだけでなく、「アフリカを立ち上がらせる」こともできるのです。

「衆生の環境やニーズに従って、一歩ずつ支援することで、少しずつその土地に愛のエネルギーと智慧の法水を吸収させるのです。一度にたくさん与えれば、却って吸収できず、直ぐに乾いてしまうでしょう。先ず、彼らが『自分にも学校建設を助ける力があるのだ。自分は決して貧しくない！』と認識するよう教育することです。慈済の最初もそうだったではありませんか？あらゆる志業は人々の愛を発揮させて成就してきました。少なくても多くても、人々は皆それだけ力を出すことができ、それが人の愛を大きくして、道心を広くしてきました。これも社会大衆に対する『大いなる教育』の一つなのです」。

「今この時、皆さんは「止まって、聞いて、見る」べきです。心の欲望を止め、心を鎮めて道理を聞き、心してこの世の出来事に目を向けるのです。そして、平穏という幸福に感謝し、この世で互助による真心の大愛を自分の目で確かめるのです。感謝の心を持った人は、真心の愛を持っています。そういう愛があれば、奉仕する力が溢れて枯れることはありません」。（慈済月刊六五七期より）

九月の出来事

訳・済運

09・01	慈済基金会はプリンストン大学、ハーバード大学、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学、コロンビア大学、英領コロンビア大学、北京大学と共同で、「印證仏学講座」を開催する。当代の仏教思想と実践に特化した講座で、生活に溶け込んだ仏教と菩薩の人間化に関する研究を推進するのが目的である。1日、「印證仏学講座」(Yin-Cheng Distinguished Lecture Series on Buddhism) がオンラインで開かれた。本年度最初の講座はケンブリッジ大学の主催で、ハーバード大学ロックフェラーアジア芸術史特設終身教授の汪悅進氏を招いて、22日、オンラインで「二十一世紀の仏教芸術：将来の展望」を講演する。
09・02	中国河南省の慈済ボランティアが7月の水害被災者を見舞った。2日に衛輝市城郊郷東天平村で340袋の化学肥料を配付して農民の農耕再開を支援した。また、12日と13日に広東省東莞市の慈済ボランティアは、新密市平陌鎮で秋の配付活動を行い、耿堂村、牛嶺村、白龍廟村、龍崗村、劉溝村で2千7百世帯に対して米と食用油などの物資を配付し、そのうちの406の弱者世帯には毛布、生活パック及び見舞金を贈呈した。
09・03	◎慈済インドネシア支部と国軍及び企業が協力して行っている、2018年スラウェシ島地震及び2019年パプア州ジャヤプラ県センタニ地区の水害被災者支援で、パル市、シギ県及びジャヤプラ県に建設された2千3百棟の恒久住宅の起用式典が3日と9日に行われた。 ◎慈済基金会は新型コロナウイルス対策用のファイザー社製ワクチン（BNT）5百万回分を購入し、台湾のコロナ禍の緩和に一役買った。

本日、顔博文執行長が代表で桃園国際空港に出向き、陳時中衛生福利部長及びＴＳＭＣ慈善基金会の張淑芬董事長らと共に、第一回空輸された９３万２千回分のワクチンの到着を出迎えた。

０９・０８

◎８月末、ハリケーン・アイダがアメリカ、ルイジアナ州に上陸し、その後、熱帯低気圧となってからもアメリカ東海岸の各州を襲い、水害と竜巻などの被害をもたらした。テキサス州、ニューヨーク、ニュージャージー、ワシントンの慈済ボランティアはそれぞれ支援活動を展開し、ヒューストンに避難したテュレーン大学の台湾人留学生たちに現金カードと緊急生活パックを届けた。本日より１１日まで、順次フラッシング、イーグルウッド、アナポリス及びロックヴィルなど被害が大きかった被災地で、住民に現金カードと毛布、食糧など緊急対応物資を配付した。

◎慈済基金会初回派遣の「２０２１慈済ハイチ地震災害支援チーム」が、

８日から１５日まで現地ボランティアを連れて、サレジアン修道女会、カリタス基金会、サレジオ会及び台湾駐ハイチ技術団体などと共に、被害が大きかったレカイ市で４回にわたる配付活動を行い、４千世帯余りの住民が約１カ月分の米などの生活物資を受け取った。９日にはサレジオ会総合学校のレカイ職業訓練センターで炊き出しが行われ、学校付近のテント区域に住んでいる被災者たちを支援した。

０９・０９

慈済タイ支部は難民や弱者住民の健康ケアで、毎週木曜日に百人の新型コロナウイルス検出サービスを始めた。本日、慈済施療センターで初めて行われ、訪れた人に防護物資と交通費が手渡された。また、陽性反応を示した人には「愛の薬」パックが配付され、合計５９人を支援した。１１日には施療センターの医師がオンラインで診察し、病状の経過を追跡した。

09・11	◎慈済基金会第4回「Fun広い視野・未来を考える～青年公益実践プロジェクト」が本日、「オンラインDemoday」活動を催し、採用された11チームを招いて社会イノベーションプロジェクトの報告が行われた。このプラットフォームを通して、より多くの若者世代に社会問題への関心を持ってもらうことを期待している。活動は初め、会場での発表会を計画していたが、コロナ禍のためにオンラインによる参加に切り替えた。 ◎花蓮慈済病院による第13回パンパシフィック国際幹細胞及び癌疾患研究セミナーが開かれた。11日と12日に25人の専門学者を招いて、オンラインで行われた。国内外約150人が参加して、癌の免疫治療や幹細胞療法に関する研究成果が報告された。 ◎慈済アメリカのニューヨーク支部ボランティア7人は、救世軍ニューヨーク本部でボランティア団体連盟が開催した「心を癒す追悼

	記念式」に慈済を代表して参加し、911同時多発テロの犠牲者を追悼した。 ◎慈済マレーシアのセランゴール支部は、20の民族や宗教団体と共に今夜、「希望の灯」と題したオンラインの慈善音楽会を催した。これはコロナ禍による困窮支援募金活動で、6万リンギッド（約160万円）余りを募った。
09・16	国際医療衛生促進協会は第6回国際医療模範賞の授与式を開催し、花蓮慈済病院国際医学センターが国際医療模範の団体賞を獲得した。
09・18	「2021年国際慈済人医会年次総会」が18日と19日、オンライン形式で開かれた。今年は「情のある防疫・医療の愛」と題し、19の国と地域の2千人余りが参加した。

各国の連絡所

本部
971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL:886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター（静思堂）
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL:886-40510777 ＃ 4002
0912-412-600 ＃ 4002

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL:886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL:886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山鎮和平路 125-5 号
TEL:886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL:886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL:886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL:886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段２４８号
TEL:886-5-5372000

慈済大学
970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL:886-3-8565301

台北支部（新店静思堂）
231 新北市新店區建國路 279 号
TEL:886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立徳路 2 号
大愛テレビ局
TEL:886-2-28989999
静思人文
TEL:886-2-28989888

アメリカ
総支部（San Dimas）
TEL:1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL:1-408-4576969
ニューヨーク支部
（New York）
TEL:1-718-8880866

カナダ
TEL:1-604-2667699

メキシコ Mexicali
TEL:1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo
TEL:1-809-5300972

ブラジル　Sao Paulo
TEL:55-11-55394091

イギリス London
TEL:44-20-88699864

フランス Paris
TEL:33-1-45860312

ドイツ　Hamburg
TEL:49(40)388439

オランダ　Amsterdam
TEL:31-629-577511

スウェーデン　Goteborg
TEL:46-31-227883

オーストリア　Vienna
TEL:43-1-7346988

南アフリカ　Gauteng
TEL:27-11-4503365

中国蘇州
TEL:86-512-80990980

香港
TEL:852-28937166

フィリピン Manila
TEL:63-2-7320001

タイ　Bangkok
TEL:66-2-3281161-3

ベトナム　Hochiminh
TEL:84-8-38535001

ミャンマー Yangon
TEL:95-1-541494

マレーシア
Penang
TEL:604-2281013
Malaka
TEL:606-2810818

シンガポール
TEL:65-65829958

インドネシア　Jakarta
TEL:62-21-5055999
大愛テレビ局
TEL:62-21-50558889

スリランカ　Hambantota
TEL:94(0)472256422

ヨルダン　Amman
TEL:962-6-5817305

トルコ　Istanbul
TEL:90-212-4225802

オーストラリア Sydney
TEL:61-2-98747666

ニュージーランド
Auckland
TEL:64-9-2716976

慈濟

２０２１年１０月２０日発行・２９８号
中華郵政台北誌字第９０９號執照登記為雑誌交寄
Printed In Taiwan

発行人　釋證厳
発行所　慈済基金会
〒 112 台湾台北市北投区立徳路 2 号
編　集　慈済日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪
電　話　(886)02-2898-9000
FAX　(886)02-2898-9994
E-mail: 021620@daaitv.com

■

慈済基金会日本支部
〒 169-0072　東京都新宿区大久保 1-2-16
電　話　(03)3203-5651 ～ 5653
FAX　(03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證厳法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。（日文組編集同人）

高雄市六亀区の三合院　雨後に刻まれる深い足跡

８月６日、熱帯低気圧と南西気流により降り続いた連日の豪雨が、高雄の山岳地帯に深刻な水害をもたらした。慈済ボランティアは急いで被災状況を調査し、物資と見舞金を贈呈した。ボランティアの何人かは土石流に襲われた六亀区中興里を訪れ、ほぼ半壊した三合院 ㊟ に住んでいたお年寄りを見舞い、怯えた心を慰めた。（ ㊟ 三合院は内庭を中心に、三方に棟が並ぶ中国南部の建築様式 ）（文・郭庭聿　撮影・張秋菊　高雄市六亀区　2021 年 8 月 10 日）

慈済日本サイト　慈済ものがたり